

日本人EFL学習者の語彙学習方略と関連諸要因との関係について
A Study on the Relationship between Vocabulary Learning
Strategies and Other Factors of Japanese EFL Learners

北 條 礼 子
HOJO, Reiko

Abstract

It has been reported that vocabulary learning and vocabulary strategies will be potential areas of study in the EFL learning environment. In Japan, however, little empirical research has been done, especially on vocabulary strategies.

The main purpose of this study is to subcategorize vocabulary strategies used by Japanese EFL high school students. The second purpose of the study is to investigate how each subcategory is related with other factors, such as learning style, personality, motivation, and gender.

First, data on the factors mentioned above were gathered from one seventy-two junior high school students in December of 2000 using a questionnaire consisting of fifty-nine items total. Secondly, the data were analyzed by factor analysis, extracting 4, 2, 5 and 4 factors for vocabulary strategies, learning style, personality, and motivation, respectively. Thirdly, regression analysis was administered using all the factors extracted above as well as gender. The results revealed that use of each subcategory of vocabulary strategies was evoked by different combinations of the factors of learning style, personality and motivation.

KEY WORDS

学習方略	learning strategy	学習スタイル	learning style
性格特性	personality	動機づけ	motivation
語彙学習方略	vocabulary learning strategy		

1. 研究の背景

近年、学習方略の中でも語彙学習方略が注目され、語彙を学習するための方略を学習者に教授する重要性が説かれている(Nation, 1990; O'Malley & Chamot, 1990; Coardy, 1997)。同時に語彙学習と語彙学習方略の両方に多くの研究の余地が残されていることも指摘されている(Gu and Johnson, 1996)。

語彙学習方略はこれまでいくつかの下位分類が提示されているが、日本人中学生を対象とした語彙学習方略として、Anezaki(1999)は

「類似性着目」、「反復練習」、「文中暗記」、「学習順序決定」の4方略を抽出し、TsujiKawa(1999)は最も使用の多かった方略として「集中して取り組む」、「声に出して覚える」をあげている。また、平野(2000)は「反復・体得重視」、「単語のイメージ化」、「興味・嗜好優先」、「音声反復」の4因子を抽出し、さらに高校生と合せて、「英語のイメージ化」、「文脈・反復重視」、「類似性着目」、「興味・嗜好優先」の4因子を抽出している(Hirano他、2001)。

また、語彙学習方略と関連諸要因との関係を調べた研究として、Yabuki(2000)は、高校生を対象とし、その語彙と個人差(動機づけ、性格、学習スタイル、学習経験)、状況的・社会的要因としての性差、語彙レベルとの関係を明らかにしようとした。その結果6因子の語彙学習方略を抽出し、また統合的動機づけと冒険心が語彙学習方略使用を促す傾向があることを報告している。

日本人学習者を対象とした語彙学習方略の研究はこれから増加するものと予想されるが、語彙学習方略の分類はもちろんのこと関連諸要因との関係も考慮に入れて行くことが必要であろう。

2. 研究の目的

本研究の第一の目的は、日本人EFL学習者(中学生)が用いている語彙学習方略の下位分類を明らかにすることであり、第二の目的は関連諸要因の下位分類を明らかにすることであり、第三の目的は語彙学習方略各因子と関連諸要因との関係を明らかにすることである。

なお、ここでいう語彙学習方略関連諸要因とは Ellis(1996)の学習方略に関するモデルを基に、選び出した要因である。

3. 研究の方法

3.1 対象者：新潟県内の公立中学2年生72名

3.2 測定具：計53項目から成る5段階尺度形式のアンケート。内訳は、①英語の語彙学習方略に関する24項目、②英語の学習スタイルに関する6項目、③性格特性に関する15項目、④英語学習の動機づけに関する8項目である。また調査実施校から英語の期末テストの得点が得られた。ここでの語彙学習方略の調査項目は、筆者が高校生を対象とした調査(2000)で用いた30項目のうち、中学生に不適切であると判断した6項目を除いた24項目である。

3.3 調査実施時期：2000年12月

3.4 手続き：約15分の実施時間で、集団調査を行った。回答形式は①については「1.まったくそうしない、2.めったにそうしない、3.どちらでもない、4.ときどきそうする、5.いつもそうする」の5段階で、②から④については「1.まったくそう思わない、2.どちらかというとそう思わない、3.どちらでもない、4.どちらかというとそう思う、5.まったくそう思う」の5段階で、1～5点までの得点化を行って項目ごとに集計した。

3.5 分析方法：因子分析、回帰分析、分散分析

4. 研究の結果

4.1 語彙学習方略

4.1.1 平均値・標準偏差

表1：語彙学習方略の平均値と標準偏差(N=72)

項目	全体(N=72)		男子(N=37)		女子(N=35)	
	平均	S D	平均	S D	平均	S D
1	3.44	1.18	3.38	1.26	3.43	1.12
2	3.43	1.28	3.19	1.33	3.69	1.18
3	3.61	1.27	3.49	1.28	3.74	1.27
4	3.74	1.23	3.41	1.28	4.09	1.09
5	2.90	1.30	2.86	1.38	2.94	1.24
6	3.43	1.28	3.38	1.28	3.49	1.29
7	2.46	1.13	2.57	1.21	2.34	1.03
8	3.32	1.24	3.14	1.21	3.51	1.27
9	2.74	1.05	2.76	1.06	2.71	1.05
10	3.04	1.35	3.08	1.34	3.00	1.37
11	2.96	1.09	2.92	1.14	3.00	1.06
12	2.88	1.20	2.81	1.33	2.94	1.06
13	3.11	1.15	2.86	1.18	3.37	1.06
14	2.94	1.27	2.89	1.26	3.00	1.28
15	2.81	1.23	2.78	1.29	2.83	1.18
16	3.47	1.19	3.24	1.23	3.71	1.10
17	2.82	1.23	2.73	1.19	2.91	1.27
18	3.46	1.28	3.16	1.30	3.77	1.19
19	3.07	1.24	2.97	1.26	3.17	1.22
20	3.38	1.17	3.41	1.07	3.34	1.28
21	2.67	1.24	2.54	1.30	2.80	1.18
22	3.06	1.07	3.00	1.15	3.11	0.99
23	2.38	1.18	2.54	1.28	2.20	1.05
24	2.54	1.24	2.59	1.30	2.49	1.20

日本人 EFL 高校生が用いている語彙学習方略に関する 24 項目への回答について、「いつもそうする」を 5 点、「まったくそうしない」を 1 点とし、中間段階を 1 点きざみで得点化した。表 1 は各項目について全体と性別の平均と標準偏差を示したものである。

4.1.2 因子分析結果

英語の語彙学習における語彙学習方略に関する 24 項目の得点について、共通性の初期値を SMC とした反復主因子法を実行し、後続因子との固有値の差に基づいて 4 因子解を適当と判断した。その結果として、再度 4 因子解を仮定した反復主因子法を実行した。バリマクス回転後、各項目の因子負荷量を得た。累積説明率は 72.88% であった。次に 4 因子の解釈にあたり、回転後の因子パターンにおいて

表 2 : バリマクス回転後の因子負荷量 (英語語彙学習方略 : N=72)

	因子 I	因子 II	因子 III	因子 IV	共通性
項目 13	0.67399	-0.01487	-0.03727	0.10398	0.466680
項目 21	0.66306	0.19666	-0.14208	0.00516	0.498541
項目 12	0.54497	0.14489	0.19162	0.11872	0.368793
項目 17	0.53650	0.02433	0.04997	0.00541	0.290952
項目 14	0.51077	0.00012	0.30109	-0.06612	0.355911
項目 11	0.49576	0.29819	0.14646	-0.17235	0.385851
項目 8	0.44885	-0.15527	-0.29789	0.35557	0.440743
項目 1	0.32354	-0.11702	0.04374	0.20515	0.162374
項目 10	0.04168	0.67719	0.22084	-0.15255	0.532368
項目 22	0.00545	0.65058	0.04469	0.17736	0.456744
項目 5	0.02689	0.60437	-0.11644	-0.05216	0.382261
項目 15	-0.02192	0.59837	0.19341	0.10691	0.407360
項目 6	0.18025	0.52609	0.21928	-0.29584	0.444869
項目 23	0.35818	0.48319	0.12732	-0.27877	0.455691
項目 18	0.23500	0.36892	0.23752	-0.11368	0.260665
項目 24	-0.00487	0.20558	0.78619	-0.15224	0.683552
項目 19	0.08899	0.19692	0.68537	0.05817	0.519807
項目 3	-0.16084	0.16818	0.53612	0.25170	0.404932
項目 2	0.19784	-0.07580	0.51504	-0.01774	0.310464
項目 20	0.33579	0.14719	0.51087	0.38564	0.544116
項目 9	0.08312	0.02766	0.30180	-0.20077	0.139064
項目 7	-0.02944	0.14068	0.15910	0.08051	0.052452
項目 16	0.13735	-0.12403	0.01111	0.80639	0.684637
項目 4	0.37884	0.23152	0.20687	0.41834	0.414922

説明分散 2.86638 2.66498 2.54679 1.58560 9.663748

(注) 網かけされた数値は 0.40 以上。

て絶対値 .40以上の因子負荷量を示した項目の内容を中心として因子を解釈することにした。バリマクス回転後の因子パターンは表2に示すとおりである。

因子Ⅰに対して .40以上の負荷量を示した項目を表3にあげた。因子Ⅰには項目13、21、12、21、17、14、11、8の計7項目が含まれていた。これらの項目内容をみると、単語を何度も繰り返して復習したり、書いたり、単語の意味も書いたりする繰り返す単語学習と、何度も単語が使われている句や英文を読んで英文にも注意するという内容なので、「反復暗記」と命名した。

表3：因子Ⅰ「反復暗記」の負荷の大きい項目とその内容(N=72)

項目	負荷量	項目の内容
13	0.67	私はおぼえた単語でも、おぼえているかどうかを確かめるため何度も復習する
21	0.66	単語をおぼえるとき、私はその単語が使われている文をおぼえる
12	0.54	私は単語をおぼえるとき、何度も英文(教科書などの)を読む
17	0.54	私は単語カードや単語リストに書いた単語のうち、わからない単語を何度もくりかえしておぼえる
14	0.51	私は単語をおぼえるため、単語とその意味の両方を何度も書く
11	0.50	単語をおぼえるとき、その語がでてきた文脈(句や文など)といっしょにおぼえる
8	0.49	私は単語をおぼえるとき、何度も書いておぼえる

次に因子Ⅱに対して、負荷量を示した項目を表4にあげた。因子Ⅱには項目10、22、5、15、6、23の計6項目が含まれていた。これらの項目内容をみると、同意語、反意語や発音の似ている単語を考えたり、単語テスト、単語カードを利用したりするなど、英単語の学習法として効果的であるといわれている、記憶術の使用や、さまざまなアプローチや学習法であるので、「効果的単語学習法」と命名した。

さらに因子Ⅲに対して、.40以上の負荷量を示した項目を表5にあげた。因子Ⅲには項目24、19、3、2、20の計5項目が含まれていた。これらの項目をみると、文字や発音を利用して単語をまとめたり、おぼえたかったり、おぼえやすそうだったり、あるいはテスト

に直接関係のある単語をおぼえたり、教師が取り上げ単語をおぼえるという、いわば条件つきで選択的に単語をおぼえるという内容なので、「選択的単語記憶」と命名した。

表 4：因子Ⅱ「効果的単語学習法」の負荷の大きい項目とその内容 (N=72)

項目	負荷量	項目の内容
10	0.68	私は知らない単語があったら、同意語（同じ意味の単語）や反意語（反対の意味の単語）が自分の頭に入っているかどうか考えてみる (例：big と large, big と small)
22	0.65	私は単語テストを利用して単語をおぼえる
5	0.60	私は知らない単語があったら、意味を調べる前に意味を考えてみる
15	0.60	私は単語をおぼえるとき、自分がすでに知っている単語で、発音が似ている単語と結びつけておぼえる
6	0.53	私は単語をおぼえるとき、何度もくりかえして発音しておぼえる
23	0.49	私は雑誌などの付録の単語カードをつかって単語をおぼえる

表 5：因子Ⅲ「選択的単語暗記」の負荷の大きい項目とその内容 (N=72)

項目	負荷量	項目の内容
24	0.79	私は同じ文字、同じ発音で始まる単語をまとめておぼえる（例：wh で始まる、what, where, why など）
19	0.69	私はおぼえたいと思う意味の単語からおぼえる
3	0.54	私はおぼえやすそうな単語からおぼえる
2	0.52	私は、自分が重要だと思う単語に下線を引く（マーカ-などで）
20	0.51	私は先生が授業で説明した単語をおぼえるようにする

また因子Ⅳに対して、.40以上の負荷量を示した項目を表 6 にあげた。因子Ⅳには項目16、4 の計 2 項目が含まれていた。これらの項目内容に共通しているのは、テストに直接関係する単語や教師がおぼえるようにと指示した単語をおぼえるという受け身ともいえるべき単語のおぼえかたなので、「受容的単語暗記」と命名した。

表 6 : 因子Ⅳ「受容的単語暗記」の負荷の大きい項目とその内容 (N=72)

項目	負荷量	項目の内容
16	0.81	私はテストに直接関係のある単語をおぼえる
4	0.42	私は英語の先生が、おぼえるようにといった単語をおぼえる

4.2 語彙学習方略関連諸要因（学習スタイル、性格特性、動機づけ、性差）

4.2.1 平均値・標準偏差

日本人 EFL 中学生が用いている語彙学習方略関連諸要因である学習スタイル 6 項目、性格特性 15 項目、動機づけ 8 項目の計 29 項目への回答について、「いつもそうする」を 5 点、「まったくそうしない」を 1 点とし、中間段階を 1 点きざみで得点化した。表 7 は各項目の対象者全員と男女別の平均と標準偏差を示したものである。以上の 29 項目のうち、平均±標準偏差の値が得点範囲（1－5）を越えた、性格特性の項目 2 と項目 4 の 2 項目を天井効果が生じたものと判断し、因子分析から除外した。

4.2.2 因子分析結果

まず学習スタイル 6 項目の得点について、共通性の初期値を 1 した反復主因子法を実行し、後続因子との固有値の差に基づいて 2 因子解を適当と判断した。その結果として、再度 2 因子解を仮定した反復主因子法を実行した。バリマクス回転後、各項目の因子負荷量を得た。累積説明率は 53.26% であった。次に 2 因子の解釈にあたり、回転後の因子パターンにおいて絶対値 .50 以上の因子負荷量を示した項目の内容を中心として因子を解釈することにした。バリマクス回転後の因子パターンは表 8 に示すとおりである。その結果第Ⅰ因子には項目 1、2 が含まれ「視聴覚型」と命名した。第Ⅱ因子には項目 6、5、3、4 が含まれ、「体験・リラックス型」と命名した。

次に性格特性 15 項目の得点については、天井効果を示した項目 2 と項目 4 の計 2 項目を削除した後の 13 項目の得点について、共通性の初期値を 1 とした反復主因子法を実行し、後続因子との固有値の差に基づいて 5 因子解を適当と判断した。その結果として、再度 5 因子解を仮定した反復主因子法を実行した。バリマクス回転後、各項目の因子負荷量を得た。累積説明率は 69.45% であった。次に 5 因

表7：学習スタイル、性格特性、動機づけに関する
項目の平均値と標準偏差 (N=72)

項目		全体 (N=72)		男子 (N=37)		女子 (N=35)	
		平均	S D	平均	S D	平均	S D
学習 スタイル	1	3.15	1.16	3.11	1.07	3.20	1.26
	2	3.14	1.17	3.16	1.12	3.11	1.23
	3	3.21	1.23	3.22	1.25	3.20	1.23
	4	3.04	1.99	3.14	0.98	2.94	1.03
	5	3.74	1.00	3.84	1.04	3.63	1.00
	6	3.06	1.11	3.22	1.18	2.89	1.02
性格 特性	1	2.61	1.31	2.95	1.29	2.26	1.24
	2 [△]	3.69	1.38	3.68	1.42	3.71	1.36
	3	2.74	1.20	2.97	1.34	2.49	0.98
	4 [△]	3.99	1.12	4.11	0.99	3.86	1.24
	5	2.92	1.21	2.92	1.16	2.91	1.27
	6	3.11	1.33	3.51	1.26	2.69	1.28
	7	3.17	1.33	3.19	1.43	3.14	1.24
	8	2.79	1.17	3.05	1.20	2.51	1.09
	9	3.17	1.32	3.41	1.52	2.91	1.04
	10	3.04	1.11	3.16	1.12	2.91	1.09
	11	3.19	1.23	3.57	1.24	2.80	1.11
	12	2.81	1.27	3.03	1.34	2.57	1.17
	13	2.69	1.18	2.89	1.33	2.49	0.98
	14	2.75	1.12	2.81	1.13	2.69	1.13
	15	2.60	1.10	2.46	1.12	2.74	1.07
動 機 づ け	1	3.18	1.28	3.05	1.29	3.31	1.28
	2	2.97	1.27	2.81	1.33	3.14	1.19
	3	3.26	1.28	3.30	1.37	3.26	1.19
	4	3.36	1.34	3.54	1.32	3.17	1.34
	5	3.67	1.20	3.57	1.21	3.77	1.19
	6	3.63	1.18	3.57	1.24	3.69	1.13
	7	3.14	1.44	2.89	1.54	3.40	1.29
	8	3.14	1.29	3.19	1.29	3.09	1.31

△ 天井効果を示した項目

子の解釈にあたり、回転後の因子パターンにおいて絶対値 .60以上の因子負荷量を示した項目の内容を中心として因子を解釈することにした。バリマクス回転後の因子パターンは表9に示すとおりである。その結果、第Ⅰ因子には項目8、11、3が含まれ「自尊心」と命名した。第Ⅱ因子には項目14、5が含まれ人と対したときの社交

性を表す内容と考えられることから「対人社交性」と命名した。第Ⅲ因子には項目1、6が含まれ「冒険心」と命名した。第Ⅳ因子には項目15が含まれていたが、この項目内容はパーティなど場面における社交性であると判断されることから、「場面社交性」と命名した。因子Ⅴには項目7が含まれ「あいまい性への耐性」と命名した。

表8：バリマクス回転後の因子負荷量(学習スタイル：N=72)

	因子Ⅰ	因子Ⅱ	共通性
項目1	0.91741	-0.04781	0.843933
項目2	0.88615	-0.02370	0.785829
項目6	-0.03274	0.76341	0.583866
項目5	-0.05927	0.62214	0.390574
項目3	0.18509	0.52106	0.305759
項目4	-0.16872	0.50721	0.285723

説明分散 1.69422 1.50146 3.195684

(注) 網かけされた数値は 0.50 以上。

表9：バリマクス回転後の因子負荷量(性格特性：N=72)

	因子Ⅰ	因子Ⅱ	因子Ⅲ	因子Ⅳ	因子Ⅴ	共通性
項目8	0.80612	0.20729	0.10997	0.16684	-0.02338	0.733280
項目11	0.77075	0.02709	0.19917	-0.14472	-0.06599	0.659759
項目3	0.76371	-0.00013	0.13668	-0.13724	0.10718	0.632252
項目14	-0.06340	0.85144	0.02457	0.07010	0.13781	0.753484
項目5	0.24136	0.80140	-0.02287	0.11884	-0.02067	0.715578
項目1	0.13365	-0.04941	0.85839	0.07342	-0.08249	0.769340
項目6	0.39720	0.12381	0.65124	-0.33844	-0.00301	0.711764
項目12	0.48797	0.08966	0.49482	0.00374	0.17479	0.521565
項目15	-0.14240	0.23386	-0.10189	0.79138	-0.18873	0.747252
項目10	0.15639	0.39121	0.35925	0.50520	0.20052	0.602000
項目13	0.17352	0.46758	0.18157	-0.58860	-0.43415	0.816630
項目7	0.03449	0.07714	-0.04194	-0.08797	0.88623	0.802045
項目9	0.10391	0.41886	0.18557	0.36331	0.45867	0.563052

説明分散 2.39990 2.04447 1.68598 1.57429 1.33327 9.028002

(注) 網かけされた数値は 0.60 以上。

さらに、動機づけ8項目の得点については、共通性の初期値を1とした反復主因子法を実行し、後続因子との固有値の差に基づいて4

因子解を適当と判断した。その結果として、再度4因子解を仮定した反復主因子法を実行した。バリマクス回転後、各項目の因子負荷量を得た。累積説明率は84.70%であった。次に4因子の解釈にあたり、回転後の因子パターンにおいて絶対値.60以上の因子負荷量を示した項目の内容を中心として因子を解釈することにした。バリマクス回転後の因子パターンは表10に示すおりである。その結果、第Ⅰ因子には項目4、3が含まれ「道具的動機づけ」と命名した。第Ⅱ因子には項目7、8が含まれ「プライドの充足」と命名した。第Ⅲ因子には項目1、2が含まれ「統合的動機づけ」と命名した。第Ⅳ因子には項目5、6が含まれ「成績向上意識」と命名した。

表10：バリマクス回転後の因子負荷量(動機づけ：N=72)

	因子Ⅰ	因子Ⅱ	因子Ⅲ	因子Ⅳ	共通性
項目4	0.93261	0.02177	0.03090	0.07723	0.87716
項目3	0.89715	0.08309	0.10651	0.25712	0.88924
項目7	0.03873	0.91298	0.12743	0.00790	0.85134
項目8	0.05301	0.85790	0.11265	0.21967	0.79975
項目1	-0.08328	0.05067	0.90889	-0.02913	0.83643
項目2	0.24653	0.19541	0.82397	-0.03206	0.77893
項目5	0.11987	0.04471	-0.07340	0.94970	0.92368
項目6	0.40757	0.43299	0.02285	0.68236	0.81974
説明分散	1.92716	1.80715	1.55215	1.48981	6.77627
(注) 網かけされた数値は 0.60 以上。					

4.3 語彙力別の語彙学習方略と関連諸要因の関係

表11：語彙学習方略因子Ⅰ「反復暗記」を目的変数とした回帰分析の結果 * p<.05

Step	予測変数	R ²	累積	回帰係数	F
1	動機づけ因子Ⅲ「統合的動機づけ」	0.057	0.057	0.16	4.22*
2	性格特性因子Ⅱ「対人社交性」	0.062	0.119	0.16	4.82*

(注) 以下の因子は選択されなかった(カッコ内R²)

学習スタイル因子Ⅰ「視聴覚型」(0.028)、学習スタイル因子Ⅱ「体験・リラックス型」(0.021)、性格特性因子Ⅳ「場面社交性」(0.003)、性差(0.030)、動機づけ因子Ⅳ「成績向上意識」(0.021)、性格特性因子Ⅲ「冒険心」(0.016)

語彙学習方略得点（標準因子得点）を目的変数とし、学習スタイル2因子、性格特性5因子、動機づけ4因子（各標準因子得点）、性差を予測変数としたフォワード・セレクション方式のステップワイズ回帰分析をおこなった。回帰分析の結果は表11～表14に示すとおりである。

表12から、「反復暗記」因子の使用は「統合的動機づけ」と「対人社交性」に喚起されることが示唆された。

表13から、「効果的単語学習法」因子の使用は動機づけの「プライドの充足」、「冒険心」、「統合的動機づけ」に喚起されることが示唆された。

表12：語彙学習方略因子Ⅱ「効果的単語学習法」を目的変数とした回帰分析の結果
* $p < .05$

Step	予測変数	R ²	累積	回帰係数	F
1	動機づけ因子Ⅱ「プライドの充足」	0.168	0.168	0.38	14.15**
2	性格特性因子Ⅲ「冒険心」	0.053	0.221	0.22	4.66*
3	動機づけ因子Ⅲ「統合的動機づけ」	0.047	0.267	-0.19	4.34*

(注) 以下の因子は選択されなかった（カッコ内R²）
性格特性因子Ⅳ「場面社交性」（0.037）、性格特性因子Ⅱ「対人社交性」（0.034）、動機づけ因子Ⅰ「道具的動機づけ」（0.026）、学習スタイル因子Ⅱ「体験・リラックス型」（0.023）、性格特性因子Ⅴ「あいまい性への耐性」（0.008）、性差（0.006）、学習スタイル因子Ⅰ「視聴覚型」（0.005）

表13から、「選択的単語暗記」因子の使用は「自尊心」と「体験・リラックス型」の学習スタイルに喚起されることが示唆された。

表13：語彙学習方略因子Ⅲ「選択的単語暗記」を目的変数とした回帰分析の結果
** $p < .01$ * $p < .05$

Step	予測変数	R ²	累積	回帰係数	F
1	性格特性因子Ⅰ「自尊心」	0.231	0.231	0.43	21.05**
2	学習スタイル因子Ⅱ「体験・リラックス型」	0.058	0.289	0.19	5.66*

(注) 以下の因子は選択されなかった（カッコ内R²）
性差（0.025）、性格特性因子Ⅱ「対人社交性」（0.023）、学習スタイル因子Ⅰ「視聴覚型」（0.008）、性格特性因子Ⅴ「あいまい性への耐性」（0.007）

表14から、「受容的単語暗記」因子の使用は「成績向上意識」、「あいまい性への耐性」、「視聴覚型」「性差」に喚起される一方、「プライドの充足」、「統合的動機づけ」がマイナスの方向にその使用に影響があることが示唆された。

表14：語彙学習方略因子Ⅳ「受容的単語暗記」を目的変数とした回帰分析の結果
** $p < .01$ * $p < .05$

Step	予測変数	R^2	累積	回帰係数	F
1	動機づけ因子Ⅳ「成績向上意識」	0.125	0.125	0.24	9.95**
2	動機づけ因子Ⅱ「プライドの充足」	0.079	0.203	-0.31	6.84*
3	性格特性因子Ⅴ「あいまい性への耐性」	0.085	0.289	0.33	8.15**
4	学習スタイル因子Ⅰ「視聴覚型」	0.072	0.360	0.26	7.52*
5	動機づけ因子Ⅲ「統合的動機づけ」	0.048	0.409	-0.24	5.38*
6	性差	0.058	0.466	0.17	7.02*

(注) 以下の因子は選択されなかった(カッコ内 R^2)
学習スタイル因子Ⅱ「体験・リラックス型」(0.013)、性格特性因子Ⅱ「対人社交性」(0.006)

5. 考察

5.1 語彙学習方略について

本研究では日本人学習者(中学生)の用いている語彙学習方略として、「反復暗記」、「効果的単語学習法」、「選択的単語暗記」、「受容的単語暗記」、という4因子が抽出された。各因子に含まれる項目の平均値を合せて考えると「反復暗記」は2.67~3.32、「効果的単語学習法」は2.81~3.43、「選択的単語利用」は2.51~3.61、「受容的単語暗記」は3.47~3.74を推移していた。ここから「受容的単語暗記」が最も用いられている方略であり、後の3因子は中程度の使用頻度であることがうかがえる。

姉崎(1999)は中学3年生99名を対象者とし、語彙学習方略として「類似性着目」、「反復練習」、「文中暗記」、「学習順序決定」の4因子を抽出している。

本研究の結果を姉崎の結果と比較すると、反復して練習したり、単語の類似性に着目するなど共通点がみられるが、特に受容的に単語をおぼえるというどちらかというと英語学習に対して消極的な方法が最も用いられている因子として抽出されたのが特徴と言えるか

もしれない。

さらに高校生の語彙学習方略を分類した矢吹(2000)の研究では、本研究と同じく日本人高校生を対象とし、彼らの用いている語彙学習方略を調査したが、その結果として6因子を抽出しているが、日本人高校生は、単語の意味を調べ暗記し、既知の単語と結びつけたり英文、文脈を利用して単語をおぼえるという、単語中心であるが英文も利用するボトムアップ式の語彙学習をしている傾向が報告されている。

高校生が用いている語彙学習方略の内容と本研究の中学生が用いている語彙学習方略を比較すると、中学生の方がボトムアップ式であっても、より単語を中心とした、消極的とも思えるような学習法を用いていることが感じ取れる。

5.2 語彙学習方略関連諸要因について

同様に、学習スタイルについては、「視聴覚型」、「体験・リラックス型」の2因子が抽出され、性格特性については、「自尊心」、「対人社交性」、「冒険心」、「場面社交性」、「あいまい性への耐性」の5因子が抽出された。さらに動機づけについては「道具的動機づけ」、「プライドの充足」、「統合的動機づけ」、「成績向上意識」の4因子が抽出された。

以上の因子は、筆者がこれまでに行った調査結果(2000)で抽出された因子と比較すると学習スタイル、性格特性は多少の違いがみられるものの大筋では内容が類似した因子が抽出された。一方、動機づけについては同一の因子が抽出された。

5.3 語彙学習方略と関連諸要因の関係について

語彙学習方略の4要因が関連諸要因とどのように関連しているのかを明らかにするため、回帰分析を行った。その結果は表16に示したが、日本人学習者(中学生)の用いている語彙学習方略4因子は、関連諸要因のうち以下のとおりにそれぞれの諸要因がかかわっていることが明らかになった。

Samimy and Tabuse(1992)は、L2学習が成功するための潜在的要因として、動機づけと情意要因としての不安、自尊心、冒険心をあげている。本研究では語彙学習方略4因子の使用を喚起する要因として、動機づけ3要因(統合的動機づけ、成績向上意識、プライドの充足)、性格特性4要因(自尊心、冒険心、対人的社交性、あいまい性への耐性)、学習スタイル2要因(視聴覚型、体験・リラ

ックス型)が抽出された。この結果は、彼らの指摘を部分的に裏付ける結果であると考えられる。

表16：語彙学習方略の使用を喚起する諸要因

語彙学習方略因子	1%、5%レベルで抽出された因子
因子Ⅰ：「反復暗記」	統合的動機づけ、対人的社交性
因子Ⅱ：「効果的学習法」	プライドの充足、冒険心、統合的動機づけ(－)
因子Ⅲ：「選択的単語暗記」	自尊心、体験・リラックス型学習スタイル
因子Ⅳ：「受容選択的単語暗記」	成績向上意識、プライドの充足(－)、あいまい性への耐性、視聴覚型、統合的動機づけ(－)、性差

また、Yabuki(2000)は、語彙学習方略として6因子を抽出したが、特に動機づけの統合的動機づけと性格特性の冒険心がいくつかの語彙学習方略因子を促しているという調査結果を報告している。

以上から、語彙学習方略使用に影響を与える要因として、少なくとも動機づけと冒険心、自尊心の存在が確かめられたことと、中学生の場合は他の性格特性や学習スタイルも複雑に影響を与えていることと言えよう。

最後に本研究の結果では、語彙学習方略のうち「受容的単語暗記」の使用においてのみ性差の影響がみられ、女子の使用が多かった。この結果は先行研究が女子の学習方略使用が多いことを報告している結果(Oxford他, 1988; Yabuki, 2000; Hirano, 2000; Hirano他, 2001)を支持するものであるが、女子中学生は成績を気にして英単語を暗記する傾向があるといえよう。その他の因子については性差の影響はみられなかった。

謝辞： 調査にご協力くださった中村浩氏に深く感謝致します。

参考文献

- Anezaki, T. 姉崎達夫 1999. 「学習方法が日本人中学生のEFL語彙の学習に及ぼす効果」 研究論集 第14号 上越教育大学大学院学校教育研究科言語系コース(英語) 発行 19-34.
- Coardy, J. 1997. L2 Vocabulary Acquisition: A Synthesis of the Research. In Coardy, J., and Huckin, T. (eds.), *Second Language Vocabulary Acquisition* (271-290). Cambridge University Press.
- Gu, Y., and Johnson, R. K. 1996. Vocabulary Learning Strategies and Language Learning Outcomes. *Language Learning*, 46, 4, 643-679.
- Hirano, K. 平野網枝. 2000. 「日本人EFL中学生の英語語彙学習方略－英語学力と性差の影響－」 上越教育大学研究紀要 第19巻、第2号、719-731.
- _____. Akamatsu, N., and Anezaki, T. 平野網枝、赤松信彦、姉崎達夫. 2001. 「日本人中学生・高校生の英語語彙学習方略－学習経験年数と性差の影響－」 上越教育大学研究紀要 第20巻、第2号、459-472.
- Hoyo, R. 北條礼子. 2000. 「日本人EFL学習者の英語学習方略に関する研究(9)語彙学習方略と関連諸要因との関係について」 上越教育大学研究紀要 第20巻、第1号、177-189.
- Nation, P. 1990. *Teaching and Learning Vocabulary*. Heinle and Heinle.
- O'Malley, J. M., and Chamot, A. U. 1990. *Learning Strategies in Second Language Acquisition*. Cambridge University Press.
- Oxford, R., Nyikos, M., and Ehrman, M. 1988. Vive la Difference ? Reflections on Sex Differences in Use of Language Learning Strategies. *Foreign Language Annals*, 21, 4, 321-329.
- _____. and Scarcella, R. C. 1994. Second Language Vocabulary Learning among Adults: State of the Art in Vocabulary Instruction. *System*, 22, 2, 231-243.
- Rubin, J., and Thompson, I. 1994. *How to Be a More Successful Language Learner* (2nd ed.). Heinle and Heinle.
- Samimy, K. K., and Tabuse, M. 1992. Affective Variables and Less Commonly Taught Language: A Study in Beginning Japanese Classes. *Language Learning*, 42, 3, 377-398.
- Tsujikawa, Y. 辻川陽子. 1999. 「第2言語の語彙学習におけるグルーピングの効果に関する一考察」 研究 論集 第14号 上越教育大学大学院学校教育研究科言語系コース(英語) 発行 99-114.
- Yabuki, Y. 矢吹洋子. 2000. A Study of the Correlations of Learner Characteristics and Vocabulary Level with Vocabulary Learning Strategies of Japanese EFL High School Students. Unpublished MA thesis presented to Joetsu University of Education.